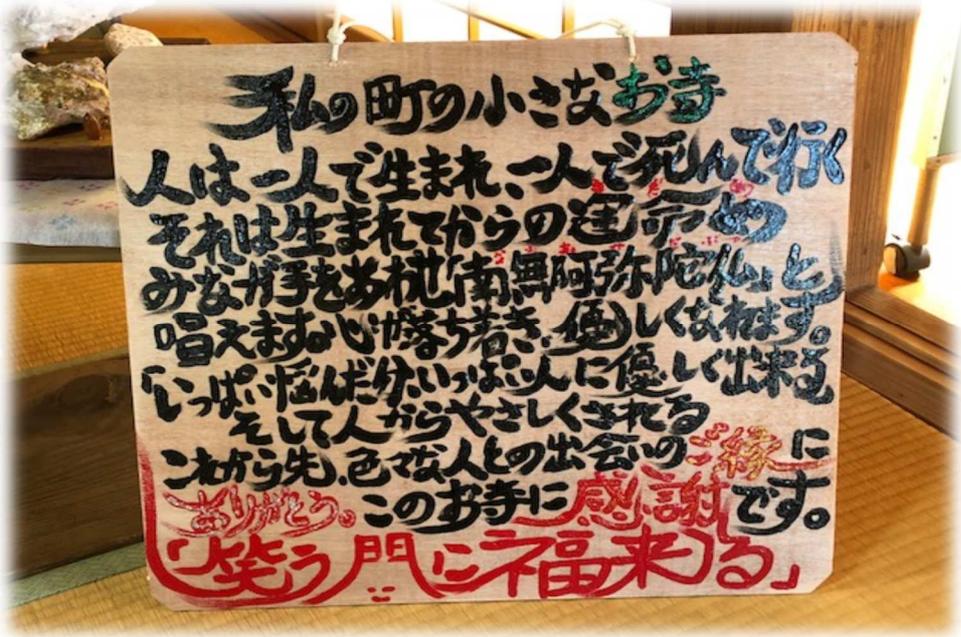


# 稱讚 二〇二〇 二号

二〇一九年九月一日発行

また舍利弗、極楽国土には、衆生しゅじやう生ずるものはみなこれ阿鞞跋致あびばちなり。そのなかにも多く一おほ生補処いっしやうふしよの菩薩ぼさつあり。その数はなほ多し。これ算数さんじゆのよくこれを知るところにあらむりやうむへんあそうぎこうず。ただ無量無辺阿僧祇劫しやうりほつ しゆじやうきをもつて説くべし。舍利弗、衆生聞かんもの、まさに発願ほつがんしてかの国くにに生ぜんしやうと願ふべし。ゆゑはいかん。かくのごときいっしよの諸上善人しよじやうぜんにんとともに一処いっしよに会えすることを得ればなり。舍利弗、少善根福德ぜんこんふくとく いんねんの因縁いんねんをもつてかの国くにに生しやうずることを得べからず。

『松説阿弥陀経』



発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺

〒二二一〇〇七五

東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号

TEL 〇三二五二四二二二〇二五

FAX 〇三二五二四二二二〇二六

HP shousanji.com

二〇一九年度 稱讚寺門信徒会費

年会費 六千円

振込先 城北信用金庫 一ツ家支店

名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会

代表 北村 信也

口座 普通 6176051

あるお盆法会で、世間では、お盆の期間、ご先祖があつた世、地獄から帰って来るといふことをお話したら、地獄から帰って来るといふので、私はお浄土から帰って来ると信じており、一家で、ご馳走を振る舞うようにしているのですが」と言われました。また、悪いことをすれば地獄に落ち、良いことをすれば浄土に往けると信じている」と言われました。

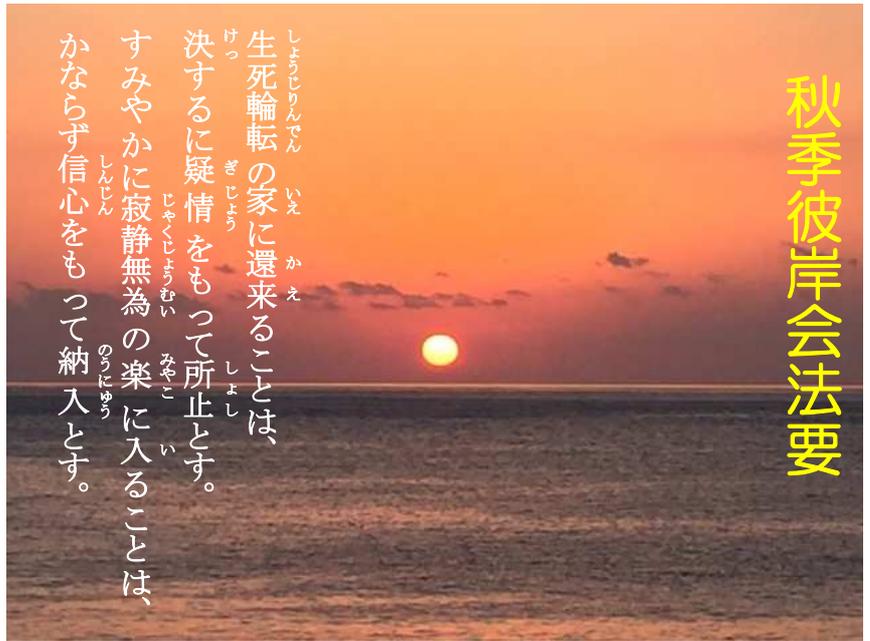
お盆は、先人がお浄土より還ってくることを窺うことで、本来、先人は仏さまと成られて、いつも私たちの傍に居てくださっていたとあらためて気づかせていただくご縁であります。

お彼岸は、この私も先人と同じお浄土に生まれ、必ず、仏と成らせていただく身であることに気づかせていただくご縁であります。

それなのに、仏さま」と言いながら、私の情（こころ）でもって、先人の生前の姿形でしか捉えられないでいられないのが私たちです。

『松説阿弥陀経』には、何故、阿弥陀さまのお浄土に生まれることを願いなさいと勧めていかると言え、単なる生前のその方ではなく、土善人」と成られた方と相まみえる 俱会一処）ことが出来るからであると説かれ、更に多生良いことをしても往けるものではないと説かれています。よくよく聞思したいものです。

# 秋季彼岸会法要



## お彼岸「秋」とは

深川 宣暢師

お彼岸(彼岸会)とは、春分・秋分の日(彼岸の中日)をはさんだ前後七日間にわたって行われる仏事・法要です。この行寺がインドから中国を経て伝わったという確かな記録はなく、日本で始まった仏教行事のようで、日本の気候からして暑からず寒からず仏道修行に適した季節であるとして、仏教の各宗において行われてきた仏事です。

生死輪転の家に還来(かえ)ることは、決するに疑情(ぎじょう)をもって所止(しよし)とす。すみやかに寂靜無為(じやくじやうむゐ)の樂(みよこ)に入ることは、かならず信心(しんじん)をもって納入(のうにゅう)とす。

日時 九月二十二日(廿)午後一時

日程 一三〇〇 門徒総代会

一四〇〇 おつとめ

一四〇〇 仏説観無量寿經

一四〇〇 仏教讃歌 みほとけは

一四〇〇 法話(住職)

一五〇〇 茶話会

一六三〇 恩徳讃

そもそも「彼岸」とは「此岸」に対する言葉で、われわれの迷いの世界をこちら側の岸(此岸)というのに対して、さどりの世界を、こちら側の岸(彼岸)というわけです。梵語の「パーラミター(波羅蜜)の訳語である「到彼岸」を略した言葉です。仏教徒においては、転迷開悟と言われるようにさとりに到ることが根本的な目的です。そのためにはしかるべき修行を実践し、善根を積むことが必要なのです。

釈尊は最初にその仏道修行を「正道」として語られました。釈尊がお隠れになりますと、そのお弟子にさまざまグループができ、さまざまな部派が形成されて部派仏教と呼ばれる

時代が展開しました。そしてその教団を維持するためにも、修行法が整えられて戒・定・慧という「三学」と呼ばれる実践が行われるようになりまし。さらに時代が下がると新たな展開がみられて、釈尊の真の精神を重んじようと大乘仏教が起ります。大乘仏教ではその実践者である菩薩(ぼだい)菩提を求める衆生(じゆう)が必ず行わなければならない行を「六波羅蜜(ろくぱらみつ 六度)」とし必須の実践としました。実は私たちも広い意味では大乘仏教の菩薩であると言えるのですから、本来なら必ずこの六波羅蜜「すなわち布施(ふせ) 施し(を)行う) ・持戒(じかい) 戒律を守る) ・忍辱(にんじやく) 耐(え忍ぶ) ・精進(しやうじん) たゆまず努力する) ・禅定(ぜんじやう) 精神を統一・安定させる) ・智慧(ちえ 眞実の智慧を得る)」を実践しなければならぬのです。

しかし、如来さまは、仏に成る前の法蔵菩薩の時、私たち衆生を「一覽(いちらん)になりました。そして朝から晩まで心を乱し、生きてゆくのが精一杯で、地獄行きの行いばかりを重ねている私たち。とても彼岸のさとりにいたるための行などにたえるような私たちではないと見抜かれ、私たちに代わってその六波羅蜜を行じてくださったのです。

『説無量壽經』にはその法蔵菩薩の修行の様子を 勇猛精進にして志願倦むことなし。もっぱら清白の法を求めて、もって群生を恵利す。・大莊嚴をもつて衆行を具足し、もろもろの衆生をして功德を成就せしむ。・国を棄て王を損てて財色を絶ち去け、みづから六波羅蜜を行じ、人を教へて行ぜしむ。無央數劫に功を積み徳を累ぬる。・(涅槃聖典)二六(二七頁)などと説かれています。すなわち その修行は雄々しくつとめ励んで少しもおこたることがなかった。ひたすらに清らかな法を求めて、すべての人々に利益を与えられた。・・・大いなる功德と智慧をもつてさまざまに衆生をなし、すべての人々のためにその功德を成就されたのである。・国を捨て王位を捨て、財物などすべて絶ちきって、みづから六波羅蜜を修行し、他の人々にもこれを修行させて、はかり知れない長い年月の間、功德を積み重ねたのである。・と、われわれの代わりに六波羅蜜を修行してくださったのです。菩薩はそのようにして、阿弥陀仏 無量壽仏)と成り、南無阿弥陀仏という名号と成って、その名号を聞きて信心歡喜」

(『涅槃聖典』四二頁) するものを必ず救うと、われわれに聞き信ぜられる仏としてはたつき続けてくださっているのです。

つまりわれわれはその名号を信じし、信受したときに、六波羅蜜の修行の功德をいただくことになるわけで、自身では必須の修行をしないままに、行じた者と同じ身に成らせていただくことになるのです。

そうしますと、春・秋の彼岸会に、仏道修行に適した気候であるからとわれわれが善根功德を積むために、この時期に限って念仏修行をするということにはなりませんね。ですから本願寺第三代覚如上人は

『改邪鈔』に、「二季の彼岸をもつて念仏修行の時節と定むる、いはれなき事」(『涅槃聖典』九二九頁)とされました。また、第二十一代の明如上人の時代には

「彼岸会」ではなく「讚仏会」と呼んで法要・法座が開かれていた時期もありました。

覚如上人は時期を定め、時節を限って念仏修行を行うことを「われのないこと根拠のないこと」とされているのであって、お彼岸の法要を行うこと自体を批判されているわけではありません。真宗の念仏者においては 行住座臥を論ぜず、長時

不退に到彼岸の謂あり」(『涅槃聖典』九三〇頁)と言われるように、いつでもどこでも、ずっと私に届いてくださる如来さまをいただいて涅槃の彼岸に到るのであると示してくださっているのです。つまり、時期を定めてわれわれ自身が念仏して善根功德を積んでゆくことが真宗のご法義になつていないと言われているのであって、いつでもどこでも届いてくださっている如来さまをいただくのですから、それがお彼岸の時期であつてもいいのです。

ただ、この日本には四季があり、暑さ寒さも彼岸まで」という気候があります。仏教界全体も仏法に目を向ける雰囲気がある時節です。気候の良いときは、お念仏してもお聴聞しても気持ちいいですね。太陽も真西に沈んで、西のお浄土を想わせていただくにも適しています。これがわれわれ凡夫の生活です。

季節は秋です。西は季節では秋に当たるともいいます。実りの秋、年を重ねて来られた方には、これまでさまざまに蔵氏過ごされてきた日々を越えて、いよいよ人生の収穫期を迎えたいという思いもありません。確かな本當の実りである間違いない如来さまが届いてくださっています。どうぞ、この真の実り＝真実 南無阿弥陀仏)をお聞きとりください。

先日、八月二三日、ご門徒さんの安田操様をご往生なされました。ご遺族よりご法名のご依頼があり、私の方で考えさせて頂きました。

操(みさお)には、上品、純粹、人としての正しい道を守る、純血を守ると言う意味があり、安田操様にとつて名は体を表すと言う程、うなずけるお名前であります。

しかし、あやつる」と読むと、匠に扱うの意味ですが、陰で人を自分の思い通りに動かす意味にもなります。

浄土三部経には、操の字は出てきません。仏教語として「操行」(戒律を堅く守る)はありますが、操様のイメージに合いません。

また、志操(主思)や徳操(堅ない道徳心)との一つに「情操」という熟語があります。それが、宗教的情操も取れると思えます。情(こころ)を上手くコントロールが、ややもする洗脳する」という誤解を生みそうです。しかし、操の本来の意味である常に変わることのない堅固な心は、阿弥陀様のお心そのもの

## 宗教的情操

義・考えを堅く守る意欲守つて変わるこの熟語があります。この熟語があります。という熟語があり、情(こころ)を、情(こころ)をすることなので、あやつる」から

ことを表わしております。

阿弥陀様が操縦する大きな船に乗っていることが大乘であり、安心するのでしょうか。それが、ご信心を頂くことであり、私の情が阿弥陀様と同じ心になるというのではなく、阿弥陀様の大きなお慈悲のお心に出会うということなのであります。操様も阿弥陀様のお心をいただき、今、既に、有縁の子どもを導いてくださつておられる意味で「釋信操」と名告られました。



大家さん宅で

## ご入仏法要

8月14日

八月に入り、足立布教所(現・稱讚寺)の設立当時の初代門徒総代さんのお一人であられました、大家忠男さんより、ご連絡がありました。

大家さん宅には、二階のお仏間に大きなお仏壇があり、ご本尊さまがご安置されております。

この度、ご連絡いただいたのは、奥さまが、二階に上がることが困難になったため、一階にもお仏壇をお求めになり、ご本尊を本願寺さんからお譲りいただいたとのことでありました。

ご連絡をいただき、お仏壇の大きさや、お名号になさるか、阿弥陀さまのご絵像になさるかをお尋ねいたしました。

奥さまの意向で、南無阿弥陀仏のお名号(金欄)一副にさせて頂き、住職が築地本願寺でお預かりしてまいり、去る八月一日にご入仏法要を大家さん宅でおつとめさせて

いただきました。

当日は、ご家族もご一緒にお参りいただきました。

蓮如上人は、蓮如上人御一代記聞書』において、

一、他流には、名号よりは絵像、絵像よりは木像といふなり。当流には、木仏よりは絵像、絵像よりは名号といふなり。

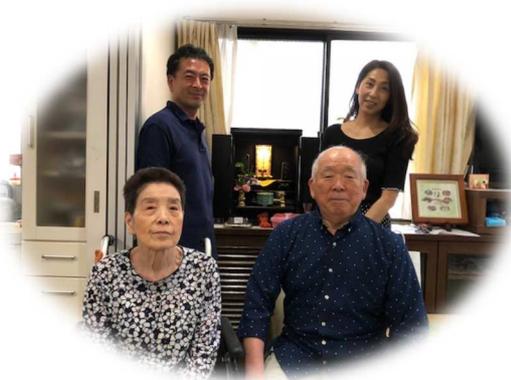
と、お示しになつておられます。

お寺は、お木仏の阿弥陀さまではないかと疑問に思われるかもしれませんね。

これは、親鸞聖人以前では、浄土門は「見仏」と言つて、私の側が阿弥陀さまを求め見ようとする教えでした。それを、親鸞聖人は、阿弥陀さまが私たちを見て願つておられることを姿形に囚われない、南無阿弥陀仏のお名号を中心据えられ、拜む対象とはされませんでした。聞法道場

からお寺になつていく段階で、お木仏になつていったのであります。

これからも聞法道場の意義を次いでいただき、ご家庭であられますことであらましよう。



# わがこころ よければ 往生すべしとおもふべからず

佐々木 大悟氏  
『宵々のことば』二〇一九年版

## 往生の要因

九月のことは、親鸞聖人が笠間 現・茨城県笠間市)の門弟の疑問に答えられた、ご消息に出てくる一文です。このご消息では、最初に「自力」他力の説明がなされ、つづいて次のように記されています。

しかれば、わが身のわるければ、いかでか如来迎えたまはんとおもふべからず。凡夫はもとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがこころよければ、往生すべしとおもふべからず。自力の御はからひにては、眞実の報土へ生るべからざるなり。

(『涅槃聖典』七四七頁、傍線引用者)  
この文を現代語訳すると、次のようになります。

ですから、この身が悪いから、阿弥陀仏が迎え取ってくださるはずがないと思つてはなりません。凡夫はもとより煩惱を身にそなえているのですから、自分は悪いものであると知るべきです。また、自らの心が善いから、往生することができるとは思つてはなりません。自力のはからいで、眞実の浄土に生まれることはできないのです。

思つてはなりません。自力のはからいで、眞実の浄土に生まれることはできないのです。

(親鸞聖人御消息 恵心尼消息 現代語版)『二二頁、傍線引用者』

この 凡夫はもとより煩惱具足したるゆゑに、わるきものとおもふべし。またわがこころよければ、往生すべしとおもふべからず」という一連の文は、往生の要因について説きつつ、また人間の本质について言及して深い言葉となつています。

ここで批判されている考え方は、『歎異抄』などでも同様に批判されている「賢善精進」の思想といえます。

賢善精進」とは、善を積みあげ賢くなり精進していくことで、自身の浄土への往生がより引き寄せられていくとする考え方です。生前の行為(善行)と来世での果報との間に一定の相関があると考えます。そのため、それこそが往生の道だと思ふ人たちは、この世ではできるだけ善い行いをし、多く学問して賢くなり、日々精進してその継続や蓄積による功德をたのみにしました。これらは確かに重要なことではありますが、法然聖人・親鸞聖人の浄土教の捉え方とは異なつた道でした。

## 仏教における行の歴史

しかし、そもそも仏教の伝統をふりかえると、古くは『七仏通誡偈』に、

諸悪莫作 衆善奉行  
自浄其意 是諸仏教

もろもろの悪を作すこと莫く

もろもろの善を奉行し

自ら其の意を浄くす

是がもろもろの仏の教えなり

とあるように、仏教では善業を行うこと(衆善奉行)こそが、諸仏が同様に主張されていた道であるとされてきました。この考え方は、その後にも仏教の伝統において形を変えつつ、繰り返して説かれます。例えば、戒定慧の三学、六波羅蜜の修行、天台宗であれば一念三千の止観行、真言宗であれば三密の行などが、それにあたります。このように、善行や善業を行うこととさとりのへのステージを一つひとつ登ると考える伝統が仏教にはありました。

また、この状況は、来世に天へ生まれるというインド社会の一般信者の考え方においても同様でした。この生天思想は、現世と来世の二つの境界をまたぐことを説いていますが、そこにおいて、その二つをつなぐ力となるものとして、生前の善業があると考えられました。この生天思想とある種の影響関係にあるなかで、浄土教の往生の考え方も出てきています。

## 浄土教における新たな行の展開

仏教のなかで、浄土教(浄土門)では、他の一般仏教(聖道門)のようにこの世界のなかでさとり段階をあげていくという行ではなく、別種の極楽国土に往生する行というものが

新しいテーマとなりました。それは「往生行」といわれますが、その「往生行」においても、阿弥陀仏や極楽浄土と私たちをつなげる行として、古来よりさまざまな善や観法が求められました。經典に説かれる内容に従い、六波羅蜜の修行や布施や寄進を行うことにより、よりよい形で極楽へ往生することも目指されました。

こうして、長い間、浄土教においても善行、善業の蓄積を重視する伝統があったのですが、法然聖人や親鸞聖人の日本浄土教では、従来の道とは異なる往生の業が示されました。

親鸞聖人の考え方は、長い間、それまで伝統としてあった善業の思想（善因善果の思想）と「往生の行」とを合わせていくような考え方と、大きく距離をとることになりました。それは、これまでの自力による善の積みあげを超えた、新しい浄土の行でした。すなわち、先にも触れました『無量寿経』の阿弥陀仏の本願（第十八願）には、

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂してわが国に生ぜんと欲ひて、乃至十念せん。もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

（『浄土版聖典』一八頁）

とありますが、親鸞聖人が重視されましたのは、その本願に則ったところの念仏と信心であり、他力の信行です。まさに阿弥陀如来によって選択された本願に説かれているままの行を、ただそのままに行う信行であり、自力の蓄積とは根本的に異なっていた行いということになります。

す。

### 愚者になりて往生する道

ここで再度、今回のご消息の一文「わがころよければ、往生すべしとおもふべからず」をふり返り分析しますと、この一節の内実としては、

わが心よくて

←そしてその善い心を前提として善行を積み重ね

←その功德によって往生する

という順序が見受けられます。親鸞聖人は、そのようなメンタリティー（精神性）全体に対して批判されていますが、とりわけ、その最初の「わが心善くて」という出発点に問題性を見られるようです。

先に引用しました「七仏通誠偈」では、「自ら其の意（心）を淨める 自淨其意」とありましたが、親鸞聖人は、そもそも自分の心が善くあることはできない、という前提を持っています。果たして、私たちの心は善くある「ま、あり続ける」ことができるのでしょうか。親鸞聖人は、そのことについて、生涯自問し続けられました。

親鸞聖人が比叡山の修行での挫折を通し、またその後の人生を通してかみしめられた事実「わが心が善くない」という思いであったと考えられます。その思いを普遍化した結果、自己を基点として善行を積みあげていきたいとする考え方を、遠ざけられたのだと考えられます。

『歎異抄』第十三条にも、類似の文言として「わがころのよくてこらさぬにはあら

ず。

（『浄土版聖典』八四三頁）

という一節がみられます。また、その著作の処々において、ご自身の心は「虚仮不実」（『正像末和讃』）であり、「蛇蝎のごとくなり」（『正像末和讃』）であるともおっしゃられており、人間の心というものの不確実性を見定めておられます。

そういう意味では、心の善き自分というもの「を前提として出発する 行」というものに対して、聖道門の伝統（自力の行）との決別があったと考えられます。

三月のことば（四三頁）でも触れられていた、法然聖人の最晩年の「二枚起請文」には、

念仏を信ぜん人は、たとひ一代の法をよくよく学すとも、一文不知の愚鈍の身になし

て、尼入道の無智のともがらにおなじく

して、智者のふるまひをせずして、ただ

一向に念仏すべし。

（『浄土版聖典』一四二九頁）

と、念仏を信じる者は「智者のふるまひをせず」とおっしゃっておられます。また、親鸞聖人のご消息にも、法然聖人は、

浄土宗の人は愚者になりて往生す

（『親鸞聖人御消息』、『同』七七二頁）

とおっしゃっておられたという記述が見られます。この「愚者になりて往生する道」を法然聖人から親鸞聖人はただかれ、人々にも説いていかれたのです。

# 「聴聞のご案内」

## 門徒総代・世話人 二日研修会

日時 九月八日 (日)  
 一〇:〇〇開会式〜一五:一五  
 会場 築地本願寺 第二伝道会館 蓮華殿  
 講師 藤本真教師 茨城東組常教寺住職  
 ・東京仏教学院講師)  
 講題 社会の変化とお寺  
 参加費 お一人 二千円

## 親鸞聖人御誕生八五〇年・立教 開宗八〇〇年についての御消息 披露・総局巡回 (公聴会)

日時 九月十一日 (水)  
 一三:〇〇〜一六:三〇  
 会場 築地本願寺 本堂  
 日程 第一部 御消息披露式典  
 第二部 公聴会

## 平和フォーラム2019

日時 九月十七日 (水) 一四時〜一七時  
 会場 築地本願寺 本堂  
 第一部 映画『いしづみ』上映  
 第二部 講演 (被爆体験) 東條明子氏

## 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要

### 法要の願い

千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要」は、宗門として、悲惨な戦争を再び繰り返してはならないという平和への決意を確認するため、毎年九月八日に、東京・国立千鳥ヶ淵墓苑において修行しております。  
 法要では、国籍、思想、信条を超えて、すべての戦争犠牲者を追悼し、平和への誓いを新たにします。

日時 九月十八日 (水)  
 一二:四五〜一四:二五  
 会場 千鳥ヶ淵墓苑  
 日程 宗門関係学校生徒作文朗読・表彰式  
 仏教讃歌斉唱・献華  
 平和の鐘  
 平和宣言  
 追悼法要



## 真宗教団連合東京支部公開講座

### アミタビーム

「私」を自当てとする慈悲の光

日時 一〇月一〇日 (木) 二二:三〇受付  
 会場 築地本願寺 本堂  
 講師 英月氏  
 真宗仏光寺派長谷山北ノ院大行寺住職)  
 やなせなな氏  
 浄土真宗本願寺派教恩寺住職)

日程  
 一三:〇〇 開会式 和訳正信偈  
 一三:三〇 講演 英月さん  
 一四:四〇 法話コンサート やなせさん  
 一五:四〇 仏法ガールズトーク  
 一六:〇〇 閉会式

## 第二七回 聞法会

日時 一〇月二十五日 (水) 一〇時〜一五時  
 会場 築地本願寺 東日本間  
 講師 信心獲得章)  
 高橋哲了師 広島・妙蓮寺)  
 門徒弟子章)  
 塚田慧明師 千葉・見敬寺)  
 当流勸化章)  
 七里順量師 草加・超光寺)

# 稱讚寺 行事予定

二〇一九年九月の行事予定



にんげん

## 人間だからこそ

い かた まよ

## 生き方に迷う

二〇一九年 心のともしび「九月カレンダー」より

二〇一九年 一〇月の行事予定

- 六日 日曜礼拝 午前九時  
のんのん法話会 午後二時
- 三日 日曜礼拝 休座
- 六日 木ののんのん法話会 午後二時
- 二〇日 日曜礼拝 午前九時
- 二六日 木ののんのん法話会 休座
- ※申し訳ありませんが、  
七日 月(十一日) 金(並びに二十五日)  
金(二十八日) 月)までお寺を留守に  
いたします。

二〇一九年 十一月の行事予定

- 三日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 木ののんのん法話会 午後二時
- 一〇日 日曜礼拝 午前九時
- 六日 木ののんのん法話会 休座
- 七日 日曜礼拝 休座  
のんのん法話会 午後二時
- 二三日 秋季彼岸会法要 午後二時
- 二四日 日曜礼拝 午前九時
- 二六日 木ののんのん法話会 午後二時
- ※十二日 月(十六日) 金(まで、築地本  
願寺宗祖報恩講に出席しております。

二〇一九年 九月 法務・布教・出向予定

- 一日 山寺家三回忌法要 一四時
- 三日 坂根家月忌参り 九時半
- 四日 中ブロック正副組長会 七時
- 七日 鳥本家五〇回忌法要 一四時
- 八日 教区総代世話人研修会
- 九日 武田家七回忌 福寿園)
- 一日 公聴会 三時
- 三日 民生委員第七合同協議会 一四時
- 七日 平和フォーラム
- 八日 千鳥ヶ淵全戦没者追悼法要
- 二三日 早崎家 外村家) 法要 一〇時
- 三〇日 秋のピハラー旅行会